Ⅴ　調査の成果と提起する諸問題

1　中期中葉の土器群について

中野遺跡からは、中期中葉の土壙１基が検出されている。この第１号土壙から、ほぼ完形の土器が２個体出土しており、他遺跡の類似例との比較検討の上、それぞれの土器の由来や位置付けを行って置きたいと思う。

第１号土壙（第14図）出土土器１、２は、内湾する口縁部が大きく外反し、円筒形の胴部が付く器形を呈し、文様帯の構成は異なるが、ほぼ類似の器形と看做すことができる。１は口縁部文様帯と頚部文様帯、２は無文の口縁部と胴部文様帯を持つという構成である。２は胴部に勝坂式終末期の文様構成を配置することから型式的帰属が明瞭であるが、１については多くの要素を持ち、それぞれの要素の解題を行わなければならない。

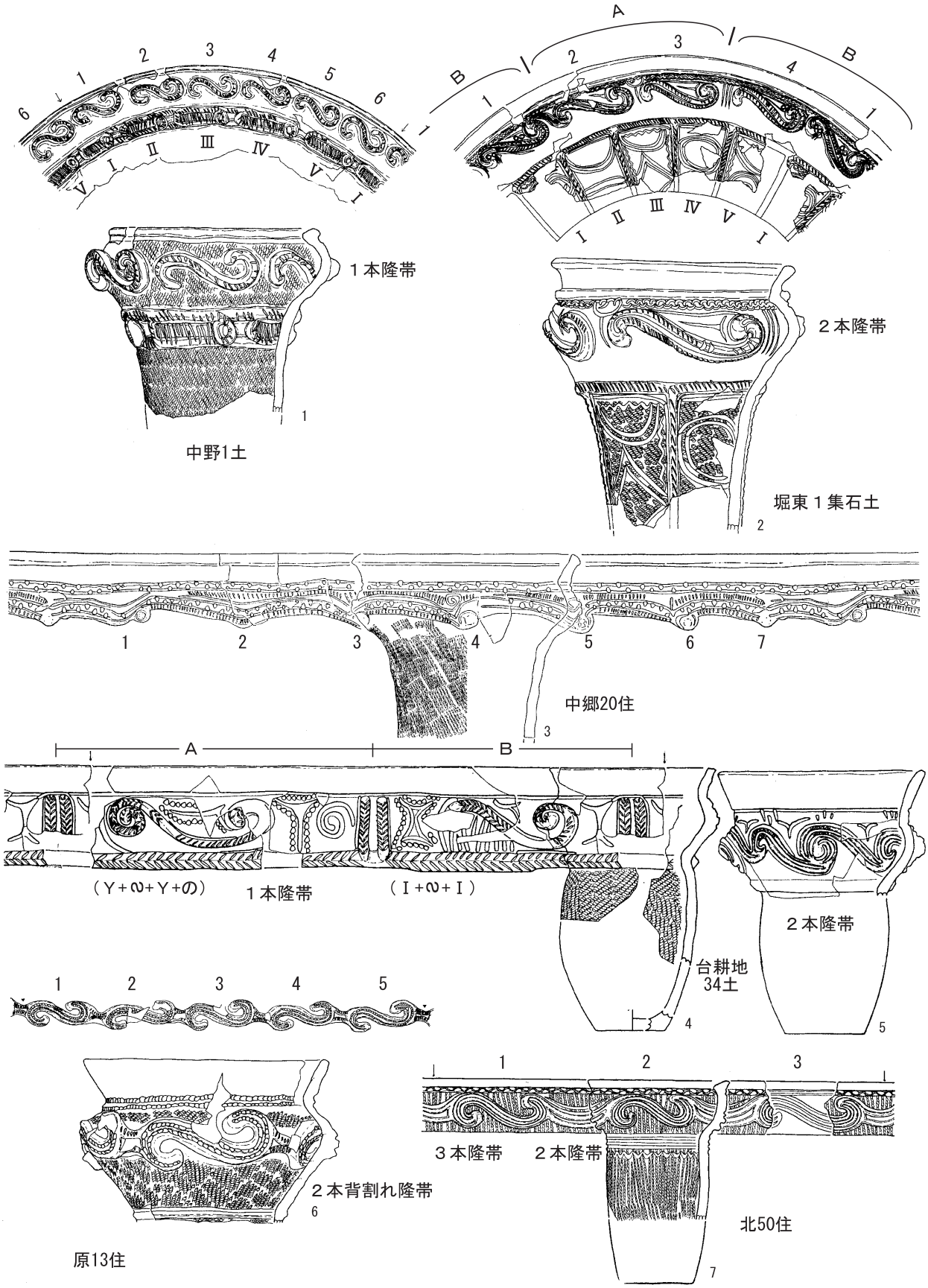
第34図には、中野遺跡第1号土壙1と類似の文様や文様帯構成、器形を呈する県内の資料を集めてみた。それぞれの土器群の比較の上、１との関係性を紐解いてみたい。

第34図１は中野遺跡第１号土壙出土土器であるが、口縁部に横Ｓ字状隆帯文を施文し、頚部に渦巻文を伴う楕円区画文を隆帯で施文する、比較的単純なモチーフ構成を呈する。口縁部の横Ｓ字状隆帯文はほぼ同じ形状で１～６の６単位に構成される。しかし、頚部の楕円区画文はⅠ～Ⅴの５単位で構成されている。口縁部と頚部の構成が異なり、口縁部に規制されずに頚部文様帯が展開していることが理解される。また、口縁部を含み、器面全面に単節ＲＬを横位施文することも特徴的である。

２は深谷市堀東遺跡（金子2000）第1号集石土壙出土で、器形等1とよく類似する。２は無文の口縁部がやや高く迫り出して外反し、内湾する口縁部に横Ｓ字隆帯文を１～４の４単位で施文する。胴部は隆帯の縦位区画の単位文を、Ⅰ～Ⅴの５単で施文している。細かく文様展開を観察すると、口縁部文様帯は背割れの隆帯で横Ｓ字状文を施文するが、単位文間の区切りや、区画内充填文に相違が見られる。まず、４単位のＳ字文間は１と２の間が背割れ隆帯の連結文、２と３の間がＹ字状の三叉文、３と４の間が縦位の３本沈線、４と１の間が縦位の1本沈線で仕切られている。また、充填文は１が三叉文と2個の円形竹管文、２が三叉文、３が三叉文、４が三叉文と１個の円形竹管文を施文する。２、３が同一の構成で、４と１が同様な構成となるが、円形竹管の個数や位置を変えている。Ｓ字文はそれぞれ区切られ、独立しているが、同じ様なモチーフを組み合わせると、（２＋３）＋（４＋１）となり、Ａ（ａ＋ａ）+Ａ´(ｂ＋ｂ´)の構成になる。さらに、連結要素を重視すると、連結される１と２、分離される３と４の二項の対立が考えられる。しかし、４と１は連結線こそないがＳ字文が接しており、連結の意識が看取される。このように、４単位であるが故に明瞭な対称性の崩しが行われていないが、円環的に少しずつ変化させながら対称性を避けている様子が窺われる。４単位構成の整然とした横Ｓ字隆帯文の配置は大木8ａ式的に特徴的と言えるが、その中に対称性を嫌う勝坂式の原理を織り込ませていると判断される。

また、胴部は５単位に区画しており、ⅠとⅣに円形のモチーフを描き、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴに上下に分割するモチーフを描いている。ⅠとⅣの円形モチーフを中心として文様配置を見ると、（Ⅰ＋Ⅱ＋Ⅲ）＋（Ⅳ＋Ⅴ）の勝坂式的な構成が把握され、二項を対立させながらも、単位とそれぞれのモチーフで対称性を崩していることが理解される。

３は嵐山町中郷遺跡（中島1982）第２号住居跡の炉体土器で、口縁部が球形と言うより「く」状の屈曲を持ち、その部分に弧状に連結する小さな渦巻文を施文するものである。渦巻文は突起状を呈し、渦



第34図　中期中葉土器群の文様構造

を巻かない箇所もある。渦巻文は7単位に施文しており、１の渦巻き部分がやや右にずれて円形の単位文化し、3〜6 が渦を巻き、2、7 が突起状を呈している。渦巻文上部の口縁部との余白部分には、1 が無文、4、5 が沈線渦巻文、2、3、6、7 が短沈線を施文する。明らかに１と４、５が裏と表の関係にあたり、１を正面とした場合に、右回りと左回りの３番目に渦巻文を施文する４と５が存在する。一見して単純な渦巻文の繰り返しの様であるが、単位数の７や正面と裏面の関係に対称性を崩す工夫が施されている。この土器は勝坂式終末平行の中峠式系の土器と考えられているが、地文に撚糸文を施文する点や、単位数、対称性の崩しに勝坂的要素を強く残しているものと判断される。

4、5 は花園町台耕地遺跡（鈴木1983）第24号土壙出土土器である。5 は無文の口縁部がやや長く外反し、球形状口縁部に横Ｓ字状の隆帯渦巻文を連結するモチーフを描いている。破片のため、全体構成は不明である。渦巻文の余白には、三叉文を施文する。この土器と伴出した4は、器形が類似し、球形状の口縁部に勝坂式的なモチーフを描いている。モチーフを分析すると、まず、２本対の縦位隆帯で口縁部をＡ区画とＢ区画の２単位に区画し、区画内にそれぞれが対応するように沈線と隆帯のモチーフを配置する。Ａ区画には（沈線Ｙ字状三叉文＋横Ｓ字状隆帯文＋刺突文を伴う沈線Ｙ字状三叉文＋沈線渦巻文）を施文し、Ｂ区画には（刺突文を伴う沈線Ｉ字状三叉文＋横Ｓ字状隆帯文＋沈線Ｉ字状三叉文）を施文する。Ａ区とＢ区は非常に構成が類似するが、三叉文のＹとＩを置き換えており、Ａ区にはさらに沈線渦巻文を追加施文して、対称性の崩しが強調されている。また、縦位区画隆帯を境に見ると、対称位置の沈線三叉文ＹとＩが対峙し、刺突文付き三叉文のＹとＩが対峙するように仕組まれており、さらに渦巻文が加わって対称性が崩されている。胴部に縄文を施文することは、２と共通する。

この２個体を比較すると、４の横Ｓ字状隆帯文は刻みを施すが1本隆帯で施文されるのに対し、5の連結横Ｓ字状渦巻文は2本隆帯で表現されている。4の1本隆帯は1のＳ字状隆帯文と共通し、5の2本隆帯は2の背割れの横Ｓ字状隆帯文と共通する要素と捉えられ、それぞれ同時期における表現方法のバリエーションと認識される。

6は伊奈町原遺跡第13号住居跡（村田1997）出土土器である。器形は5に類似し、口縁部に横Ｓ字状隆帯文を1〜5の5単位に配置し、それぞれを2本隆帯で連結する。隆帯上には、2列の結節沈線が背割れ隆帯状に施文されている。大木8ａ式的な色彩が強いが、単位数を5単位にする点で、勝坂式の対称性を崩す行為が看取される。

また、7は原遺跡と隣接する伊奈町北遺跡（金子1987）第50号住居跡出土土器である。球形状の口縁部に短く外反する口唇部を持つ点は1と類似し、撚糸文地文は3と類似する。口縁には横Ｓ字状隆帯文を1〜3の3単位に配置し、それぞれを連結しており台耕地遺跡5に近似する。そして、Ｓ字状隆帯文は2本の背割状沈線による3本隆帯で施文されるが、それぞれは2本隆帯で連結されている。2本隆帯の連結は5、6と同様である。連結部が長いため、この部分をＳ字状隆帯文に見立てることも可能で、5単位の連結文と考えることもできよう。

7は組成から加曽利ＥⅠ式初頭段階に位置付けられるもので、6より若干新しく位置付けられるものである。しかし、6の背割状2本結節沈線が沈線文化して7の3本隆帯となり、5単位の横Ｓ字状隆帯文が3単位に、場合によっては5単位の変化形態とも考えられるが、変遷することに非常に濃密な系統的関係性が看取されるのである。また、3もしくは5単位構成が明らかに勝坂式の構成原理であることはまま上遺跡の報告書で検討した通りであるが（金子2001）、7は大木8ａ式及び東部関東的な系統要素を持ちながらも勝坂式の構成原理が継承されており、多系統要素が糾合されて加曽利ＥⅠ式初頭期の土器群が成立してきたことを具現化する好例と言えよう。

以上のように、勝坂式終末期における県内北西部と南東部の、主に大木8ａ式と勝坂式の混交する様相を比較してきたが、１本隆帯、２本隆帯、３本隆帯描出、単位文連結要素、連結手法、単位数などに地域的な様相が窺われると共に、勝坂式の構成原理が地域的な変容を受けながらも顕在化されていることが観察された。

中野遺跡の１は口縁部が６単位構成であるが、これは大きくは３単位の倍数と捉えることができ、勝坂式の原理が作用していると考えられる。また、口縁部文様帯と勝坂式的な頚部文様帯を別構成とすることも、他に同様の事例があることから決して偶然の出来事ではなく、大木式的な要素及び構成に対してさえも、対称性を崩すという立場から勝坂式の主要な構成原理が働いた結果であると判断されるのである。

従って、中野遺跡の１は、７以外の他の土器群とほぼ同時期の加曽利ＥⅠ式成立直前期に位置付けられるもので、大木8ａ式の大きな進出期における勝坂式の構成原理の変容を物語るものであり、来るべき加曽利ＥⅠ式成立に向かっての準備が行われている土器として注目、評価される資料なのである。

２　晩期の住居跡と出土遺物について

中野遺跡からは、県内でも珍しい晩期初頭の住居跡が２軒検出された。この秩父地方においても晩期の住居跡検出例は非常に少なく、貴重な資料を追加したことになる。ここでは中野遺跡の住居跡の形態と、該期の遺跡が集中する大宮台地や他県の事例との比較の上、中野遺跡検出の住居跡及び出土土器のの位相を検討してみたいと思う。なお、参考資料を第35図、第36図に示した。住居跡の大きさは120分の1、土器は８分の１に統一してある。

まず、中野遺跡の晩期初頭住居跡の特徴は、径４～５ｍ前後の円形に近い隅丸方形か楕円形を呈し、円礫の石囲炉で、明瞭な壁溝や柱穴を持たない点にある。柱穴は大きな土壙状のものや、小さく浅いピットが想定されるが明瞭ではない。出土土器から晩期初頭の安行Ⅲａ式終末期に比定されるの時期で、円形を基調とした住居形態であることが最大の特徴として捉えられよう。

秩父地方で晩期の住居跡は、合角ダム水没地域関連の調査による下平遺跡（橋本1995）で検出されている。下平遺跡第1号住（第35図）は中野遺跡第2号住居跡とほぼ同様な規模の、径4ｍ強の楕円形の住居跡で、板状角礫を楕円形に配列した石囲炉を持つものである。やはり、柱穴は明瞭ではない。時期は安行Ⅲｂ式～Ⅲｃ式にかけての遺物が出土しており、中野遺跡より若干新しい時期の所産である。

また、第３号住居跡は長径5.5ｍを測るほぼ方形を呈し、壁溝を持ち、４本柱を主柱とする構造である。炉は角礫を方形に並べた石囲炉である。安行Ⅲｂ式期の所産と思われる。出土土器は、後期から続く安行系の波状口縁精製深鉢土器１が出土している。方形で４本主柱、入り口部の対ピットと思われるピットも確認されることから、大宮台地の晩期安行式期の住居跡と同系の住居形態と推定される。

これらの少ない例からではあるが、秩父地方では、円形の住居跡と、安行系の方形の住居跡がほぼ同時期に存在し、安行Ⅲｃ式期にも円形の住居跡が存在していることから、それぞれの住居形態には系統差が現れていることが想定される。

秩父地方から離れ、県内でも北部地域の深谷市新屋敷東遺跡（新屋1992）でも、晩期の住居跡が検出されている。新屋敷東遺跡第６号住居跡（第35図）は径5.5ｍ前後の楕円形を呈し、浅い柱穴が円形状に並ぶ。その内４本を主柱と認識することもできる。炉は楕円形の地床炉である。また、第５号住居跡も径4.5ｍ前後の円形を呈し、柱穴が円形に並ぶ。その内4本を、第６号住居跡と同様に主柱と認識することもできる。第６号住居跡からは、安行系の波状口縁深鉢土器（1、2）が、大洞ＢＣ式系の土器（4）